

# 海と島を再生する 答志島の若い力

鈴木さわこ

藻場の再生活動が評価され、「農林水産祭天皇杯」を受賞した答志島の漁協青壮年部。伊勢湾口に浮かぶ答志島は、わずかな敷地に肩寄せ合うように建つ家々の合間に狭い路地が迷路のようにめぐらされた典型的な漁村である。島という限られた空間では「自分たちでできることは自分たちでやるのがあたり前」。相互扶助の精神が染みこんだ島の生活は、若者を中心にした明るい未来を模索する推進力となっている。

## 藻場の再生

### 答志島の青年たちが示した二条の光

平成二一年一〇月、第四八回「農林水産祭天皇杯」の発表が行われた。これは農林水産関係の優れた活動を表彰する制度の中でも、最も名誉ある賞といわれている。水産部門から選ばれたのは「若者が育む海の森づくり」青壮年部によるアラメ場再生への挑戦」をテーマにした、鳥羽磯

部漁業協同組合答志支所の青壮年部の活動だ。アラメ場の再生を目的とした新しい技術の確立や費用の削減、そして将来性を高く評価された上での受賞であった。

鳥羽磯部漁業協同組合は平成一四年、旧答志漁業協同組合を含む鳥羽市の一六漁協と磯部町（当時）の六漁協が合併して誕生した大組織。現在の答志支所青壮年部は二七歳から四〇歳までの四三名で構成されており、平均年齢は三三歳。若い漁業者が多く、同年代の横のつながりだけでは



アラモ再生作業にとりくむ答志支所青壮年部のメンバーたち（青壮年部提供）。

なく、世代を超えた縦のつながりの強さが特徴である。

天皇杯授与のために明治神宮での式典や、皇居での天皇陛下との拝謁など、華々しい場で脚光を浴びることも多い一年となったわけだが、活動を振り返る当の本人たちには、受賞をうれしく思いつつ、その反響にとまどいを見せる海の男たちのはにかんだ笑顔があった。

### 豊かな漁場に 囲まれた答志島

答志島は鳥羽市鳥羽港の北東一・五キロメートル、伊勢湾口部にある人口約二六〇〇人の県内最大の有人島である。島の周囲は海岸線が入り組む複雑な地形で、太平洋の黒潮と栄養塩の豊富な伊勢湾の潮流が交差している。また、周辺にある無数の天然礁と沖合に広がる砂地のおかげで多



昭和30年代の答志島の海女小屋にて。真ん中の少女が大人になり、現役の海女さんとしていまなお活躍中（山下伴郎さん提供）。

種多様な漁業が行われてきた。おもな漁業として、イカナゴ、イワシ類の船曳き漁、マダイ、アジ、サバの一本釣り漁やイセエビなどの刺し網漁に、アワビ、サザエなどの海女漁やタコ壺漁。それらのほとんどが一トン未満から一五トンほどの漁船による家族単位での漁となっている。

「は愛幡度行  
の八年に一  
さん」のり  
で八幡が執  
元さん」の20  
地さん」の20  
今年、地元で「は愛幡度行の八幡が執りなされた（永富洋一さん提供）。



昔から漁業を中心として発展してきたこともあり、現在も島内での活動や伝統行事などは漁業関係者が主導することが多い。答志島の守護神が祀られた八幡神社にて、平成二二年一月下旬に催された二〇年に一度の遷宮祭も、漁業関係者が率先して執り行っている。

「漁師が元氣だと島にも活気が出る」――島の約八割が漁業にかかわっており、

経済面だけでなく人望の面でも、漁業従事者が厚く信頼されていることが分かるだろう。

### アワビが消え、アワビの漁獲量が減少

この豊かな海に囲まれた答志島で、経済の中心である漁業にかけりが出はじめたのは平成五年のこと。伊勢湾に面した海域に広がった磯焼けの発生が発端だ。磯焼けとは、海中に群生する大型の海藻が著しく衰退または消失してしまいう現象をいい、全国各地の浅海の岩礁地域で発生している。さらに、いったん磯焼けが発生すると藻場の回復までに長い年月を要し、結果、藻場に依存する生物たちの成長不良や減少を招き、沿岸漁業に大きな影響を及ぼしてしまいうため、全国的に深刻な問題となっている。

磯焼けの原因について、答志支所の青壮年部に話を聞いてみた。魚による食害、海温の上昇、護岸工事による砂浜の減少、伊勢湾内の海水汚染、いろいろ考えられるが、複合的な要因も含めて憶測の域を脱しないという。ただ、「二〇年くらい前までは商売にできるほど、たくさんのアラメが生い茂っていたよ。それがいまではごっそりなくなってしまっている」と口を揃えて言うほどの、大規模かつ深刻な磯焼け。それと同時にアワビなどの漁獲量が激減している。

この海域の磯焼けで減少したアラメという海藻は、コンブ科に属する多年生の海藻である。地元では食用として用いられ、イワシやタチウオなどをアラメで巻いて甘辛く煮付ける「アラメ巻き」や、酢の物などの郷土料理として愛されている。日本ではおもに本州太平洋沿岸北中部に広く分布しており、岩礁の上で群生し海中林（アラメ場）を形成するので、アワビなどの貝類や魚たちのエサや産卵、または育成場所として重要な位置を占めているといわれる。

激減したアワビの資源回復のため、稚貝の放流や漁の操業日の制限などに努めたものの、漁獲量は低迷を続けた。やはり藻場を失ったままでの根本的な解決はないだろう、そう考えてアラメ場の再生を試みるようになったのが、いまから七、八年前のことだった。

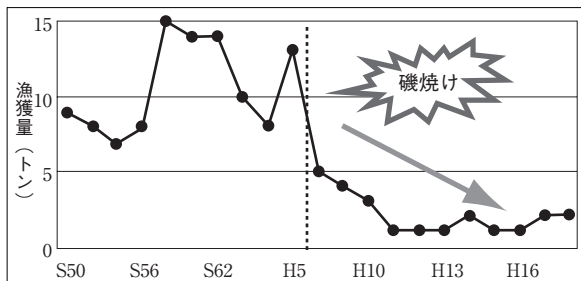
### 試行錯誤の末、 アラメ場の再生に成功

アラメ場の再生方法について、まず鳥羽市水産研究所に

図1 アラメの分布図（平成11年）



図2 答志地区におけるアワビ漁獲量の推移



相談をしたところ、アラメの種苗生産は可能であり、種苗を使った造成が可能だと聞かされた。そこで、青壮年部でアラメの生育にチャレンジしてみることとなる。

「もちろん、藻場を再生することで、アワビや魚が戻ってくる」といなどは思っているけれど、それよりも自分たちが小さいころ見てきた海がなくなっていくことを何とかし

たかったし、かつての豊かな海をそのまま将来へつなげたかった」

誰かれともなくはじまった作業も漁協組合員からの賛同の声が増えてきたこともあり、四年前から青壮年部全体の取り組みとして本腰を入れはじめた。しかし、なかなかアラメの生育はうまくいかない。手探りながらも、まずはすでに成功しているコンブの造成方法を中心に試してみる。アラメの幼苗をロープに巻きつけ、おもり代わりに鉄のチェーンをくくりつけて海底に沈める方法だ。しかし、残念なことに四ヶ月後にはすべて枯れてしまっていた。潮流に揺さぶられ、横転を繰り返すうちに苗がダメージを受けてしまったようだ。

次は、ロープの代わりに重さのある自然石に幼苗を巻きつけ、着底部を安定させてみた。これなら幼苗が波にもまれて傷つく可能性がなくなる。五〇キロ前後の自然石を集めて作業を行うのはかなりの重労働となったが、今度こそという手ごたえも感じていた。だが、結果は失敗。半年後に確認してみたところ、アラメはしっかりと自然石に付着していたものの、葉の部分はほとんどなくなり、茎が残っているというありさま。その採食痕から魚による被害だということが推測された。

7月に行われる海中ネット設置作業。青壮年部有志10名による潜水作業は年数回行われる(青壮年部提供)。



3月中の育苗。3月に投入されたアラメの幼苗も8ヶ月後には食べられなくなりました(青壮年部提供)。



そこで平成一九年、食害対策としてネットを設置することに決めた。魚の食害は黒ノリやワカメの養殖での経験上、ネットで囲むことで予防ができる。五〇キロ前後の自然石を数百個あつめ、アラメの幼苗の取りつけ作業をし、造成場所に沈め、潜って沈めた石を安定させた後、ネットで囲

図3 自然石を利用した造成方法の模式図

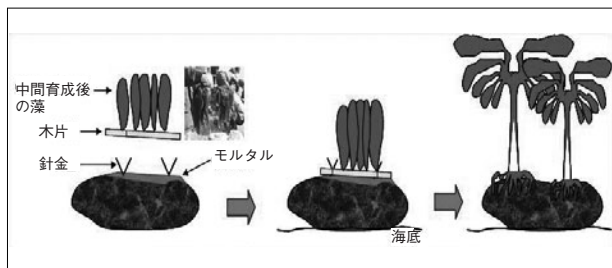


図4 藻場再生作業の年間スケジュール表

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作業内容	★ 〔水産研究所〕 ・アラメ幼芽育成			〔潜水〕アラメ配置 ・アラメ投入 ・幼体取り付け ・針金埋め込み ・石拾い	★ 〔潜水〕ネット設置作業 ・食害防止ネット作成		(ネット内で育成)			★ 〔潜水〕アラメ石の移設 ・ネット取り外し		

い、半年ほど経って食害を受けなくなる大きさままで育ててからネットをはずす(ネットを設置したままにすると付着物で目詰まりするため)というのが、大まかな作業の流れになる。時間も手間もかかる作業だが、市場が休みの時や漁に出られない時、自主的にメンバーが集まって行われた。その結果、二〇センチの幼苗だったアラメが一年で一メ

ートルを超え、食害に遭わない大きさままで順調に育ち、磯焼けしている海域への移設が行われた。さらに、水産研究所によってアラメが成熟して遊走子を放出することが確認され、造成したアラメが周辺の海域に自然増殖をする可能性も期待できるようになったのだ。

### 自分たちの海の環境を 元に戻したい

これら一連の活動の成果が認められ、みごと農林水産祭天皇杯の受賞へとつながったわけだが、評価される結果を残すことができたのは、青壮年部の動きを支える力があつたこともつけ加えておきたい。

食害を避けるためのネット設置で、潜水作業が必要となつたときのこと。潜水作業にプロのダイバーを頼むと一回で数万円の費用がかかり、活動を続けていくには金銭面ではかなりの負担が生じてしまうことになる。そこで、青壮年部のメンバーの中から一〇名ほどが自費でダイビングの資格を取得し、潜水作業に挑んだ。

漁協もこの決断を親身になってバックアップ。潜水に必要な器具を備品として扱い、潜水作業がともなう仕事を幹旋するなど、できるだけ個人に負担がかからない方法を一緒に考えてくれたという。また、世界有数の飼育展示規模を誇る鳥羽水族館も活動の趣旨に賛同し、潜水作業のアド

平成22年11月、  
地元の小中学生も  
アラメ苗の移設作  
業に参加した（青  
壮年部提供）。



バイスやサポートを申し出てくれた。さらに平成一九年度から水産庁の離島漁業再生支援交付金を使えるようになったことで、作業の中の金銭的な負担を軽減できたのもありがたかったという。

「各方面からいただいた応援のおかげでこうして認められるだけの成果が出せました。テレビや新聞の取材も増え、答志島が全国各地から注目されるようになり、うれしく思います。

でも、アラメの再生というのは一つのきっかけにすぎません。平成元年ごろのアワビ漁では、午後三時からじまの収穫したアワビの確認作業が夜の一〇時までには終わらないほど豊漁だったのが、いまでは一時間足らずで終了してしまう。量にして一〇分の一になってしまいました。何とか漁獲量を増やしたいとは思いますが、ここまで来るとアワビだけの問題ではありません。海が元に戻ってほしいという気持ちが一番なんです。伊勢湾からの流れの受け口でもある漁場だから、汚水やさらなる海水温上昇が起こったら、どんなに自分たちが活動しても、またもとの磯焼けが広まってしまいかもしれない。この活動はゴールではなく、ほんとうにはじまったばかりです。

ただ、こうして栄えある賞をいただいたことで、全国の方々が海の現状を知り、自分たちの問題として捉えてもらえたらと思っています。地元の小中学生にアラメの再生活

動を体験してもらっているのも、これからの海について一緒に考えてほしいからです」

青壮年部の気持ちを代表して濱口輝満さんが答えてくれた。

### 寝屋子制度が育てる

#### 「答志島気質」

今回の取材中、はじめてお会いするにもかかわらず、島の方々がすぐに打ち解けて協力を惜しまない様子に感動する場面が多かった。たとえば、青壮年部に取材をお願いしたのは、仕事が終わる日の沈む時間から。翌朝三時から仕事があるというメンバーもいるなか、気さくに集まってくると時間を気にすることなく熱のこもった話をしてくれた。取材を終え、宿に戻ってから数名が集まってくれ、答志島のいろいろな話を聞かせてくれた。また、「島の旅社」(後述)の山本加奈子さんに島内を案内してもらっていると、さも、取材だというと近所に住む人が一緒に説明に加わり、さらに声をかけ合って集まってきてくれる。しかも、皆が和気藹々としてとても仲がいい。

夜、宿で話をしてくれた民宿「しま」のご主人、中村和久さんと青壮年部の濱口峰明さんに「なぜ、そんなに仲がいいのですか」とたずねたら、「寝屋子兄弟だから」と笑って教えてくれた。「寝屋子」とは聞きなれない言葉だが、



の寝でのい然くさ  
ちのん前、同続郎  
たいん前、同続郎  
子祝をほどが、親が伴  
屋成人親15年写真まの交下(山提供)。

元は全国の漁村で広く行われていた社会慣習で、中学校を卒業した男子が約一〇年もしくは結婚するまでの間、食事を実家で済ました後、「寝屋親」と呼ばれる世話役の家に一緒に寝泊りする。多感な時期を集団で暮らすことで強い絆と信頼関係が築かれるという。現在は、ここ答志島の答志地区にのみ残っており、昭和六〇年に鳥羽市の無形民俗文化財に指定されている。

「ここでは、声をかければすぐに皆が集まってきて手伝ってくれますよ。小さな島だからお互いを認め合い、助け合わないと生きていけない。いまもその精神が根づいているのだと思います。家を建てるときも壊すときも、葬儀だってできることは助け合っ



て自分たちでするのがあたり前。それは寝屋子制度だけでなく、青年団、消防団、町内会役員、老人会と、誰もが必ず島のために働くことで身に染み付いているんです」と、寝屋親でもある島の旅社の山下伴郎さんが教えてくれた。助け合うことや、人のために何かをすることはあたり前、自分の行動に責任を持つ——。島に根づいた相互扶助と連帯の精神＝島気質がここにもあった。

## 島の活気を生む さまざまな自主的活動

青壮年部以外にも、答志島気質を發揮した試みのいくつかをピックアップしてみたいと思う。

まずは「島の旅社」。これは、独特の習慣が残るこの島の良さを広く知ってもらおうと、答志島に暮らす人たちが企画したオリジナルツアーを実施したりしている組織だ。観光客と島の住民が直接触れ合えるようなスタイルをとっており、地域活性化に貢献したとして、平成二二年度の「サントリー地域文化賞」を受賞した。

「自分たちでは気づかないでいる島の誇りや良さを、他の地域の人から評価されることで、島の人も喜んでくれるし、島全体を活性化させたい」と、山下伴郎さん（島の旅社推進協議会会長）はじめ女性スタッフ三人という少数精鋭で頑張っている。沖合いに位置する無人島・浮島の環境をそのま

ま生かした「自然水族館」は、磯遊びとキャッチ&リリースの精神を子どもたちが学べるとしてとても人気があるほか、観光用の「海女小屋」を使って海女さんの話を聞きながらのバーベキューや、迷路のような路地裏を島の味覚や生活感を味わいながら散策するツアーなどがある。

この迷路が迷い入る路地のよう組んだ町並み。  
台通るの狭い路地をのり組んだ町並み。



荷物運搬の便利な「じんろ車」は、製作者の名前から名づけられた島の手押し車。



### 鈴木さわこ

1969年生まれ。早稲田大学第一文学部東洋哲学科卒業。主婦と生活社にて編集者として活躍ののち、フリーランスに。人物や暮らしにスポットを当てた取材を中心に「ホームスウィートクラフト」「クラフトCafe」（ともに日本ヴォーグ社）など多数。

また、住民主体の「答志島活性化21委員会」では、青年団から老人会までの各自治団体代表者や小中学校教職員らが参加し、「地産地消」「後継者育成」「くらしと文化」をテーマに活動を行っている。ウォーキング大会や島外から来たお嫁さん向けの料理教室のほか、神祭じんさい（旧暦正月に開催される八幡神社の大漁祈願祭）のクライマックスを飾る獅子舞を地元の小学生にむけて披露し、郷土文化への知識を深める機会を設け、後継者育成に力を注ぐ催しも興味深い。

そして、住民有志や漁協などが二〇年ほど前から始めた花嫁対策のお見合いイベント。これは答志島だけでなく鳥羽市内の島々も含まれているが、出合いの場が少ない島の漁業従事者の花嫁不足を打破するべく、いまま年二回開催されている。専門のアドバイザーとともに「真剣な島のお嫁さん」候補者との交流会は、成婚率の高さが評価さ

れ、全国各地から視察の希望も多い。なかにはイベントスタッフとして参加し、交流の方法を学びたいという人たちもいるという。いまでは鳥羽市が引き継ぐ形で漁業関係者以外の地元男性も参加し、さらに大きな催しとなっている。こうした試みの一つひとつは、トップダウンではなく、地道な活動としてはじめられたものばかりだ。「問題点は何か、自分たちはどう解決していくか」が明確に示されており、島全体がそれぞれの活動の意義を認め、助け合うことでさらに活気が生まれている。この相乗効果は答志島氣質のなせる業かもしれない。

### 「自分たちの海、自分たちの島」への愛着が活性化への鍵

漁業は答志島をはじめ、海民としての生き方そのものであり、生活の基盤である。また漁業生産だけでなく、海難救助や自然環境の保全などの大切な役割も担っているにもかかわらず、人口の減少と高齢化はすすみ、漁業に従事する人は着実に減ってきている。

「漁獲量も減り、魚の価値も下がって儲けが出ない。漁を継続する意欲が湧かなくなる人も増えている。とても危険な状態です。漁業はそう簡単に従事できるものではない。だから、いったん右肩下がりで減りはじめると歯止めが効かない。一時的なばらまきによる救済事業は無意味です」

答志支所青壮年部のメンバー。右から濱口輝満、勢力幸広、橋本政幸部長、濱口峰明、川原栄策の各氏。



水揚げ時の漁港には、赤ん坊を背負った若い奥さんたちの姿も（山下伴郎さん提供）。

## とうししま 答志島 data

鳥羽港の北東約1.4kmに位置する。面積6.98km<sup>2</sup>、周囲26.3km、人口2,594人（平成22年12月現在）。島の北東部に答志町答志、答志町和具、南西部に桃取町がある。漁業従事者が約50%を占め、次いで観光業が盛ん。夏場を中心に海水浴客や釣り客などで賑わう。平成4年に和具サンシャインビーチ桃取が完成。同14年には、和具浦漁港の塩ワカメづくりが環境省の「かおり風景100選」に選ばれた。



鳥羽市神島の出身で、同漁協常務理事の藤原隆仁さんも危惧するとおり、これといった決定的な解決策は見いだせてはいない。

こうした状況下にあつて、答志島の漁協青壮年部をはじめとした、「自分たちの海、自分たちの島」への愛着こそが現状を打開する鍵なのではないか。

「僕たちが子どものころ、夏休みは毎日、海に潜って遊んで昼寝して、海で一日じゅう過ごしていましたが、島の人々が皆で面倒みてくれた。そういう答志島の良さを将来

の子どもたちにも残すことが僕たちの役目だと思っている」。青壮年部長橋本政幸さんの言葉にメンバーの皆が大きくうなずいた。

島が昔から持っていた、助け合う心、認め合う心。答志島の青年たちがあたり前のように口にする「自分たちの島を自分たちで何とかしたい」という思い。この他人まかせにしない姿勢が、低迷する産業などの活性化を支える大きな原動力になるはずだ。

### 〔参考資料〕

鳥羽磯部漁業協同組合答志支所青壮年部 浜口峰明「若者が育む海の森づくり〜青壮年部によるアラメ場再生への挑戦〜」